

年 組 番 名前

「はなはさかりに」 ぼうせんちゅうしゃくふりんと そのに

次の () 内の挿入注釈を参考に、ノートに書写した本文に傍線注釈をしなさい。 仮名書きを常用漢字に直すこと。 () 内は傍線注釈では挿入として記すことになる。 **挿入注釈は必ず書くこと。** また、《 》には自分で考えた挿入句を入れること。

太字の語を文法的に説明しなさい。

担当に当たった人は、**授業開始前に黒板に傍線注釈をノートから写し、下段にある問に答えられるように準備しておくこと。**

⑨ 望月のくまなきを千里のほかまで眺めたるよりも、暁近くなりて待ち出でたる《 》が、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる(ようすや)、

⑩ 木の間(からもれるつき)の影、うちしぐれたるむら雲隠れのほど、またなくあはれなり。

⑪ 椎柴・白樫などの、(みずに)ぬれたるやうなる(つやつやした)葉の上に(つきのひかりが)きらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがたと、都恋しうおぼゆれ。

⑫ すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。⑬ 春は《 》を《 》家を立ち去らでも(おもいをはせたり)、《 》の季節の(月の夜は閨の内ながらも《 》を《 》を)思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。

⑭ よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。⑮ 片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。

⑯ 《 》の花のもとには、ねぢ寄り立ち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、果ては、大きな枝、心なく折り取りぬ。

⑰ 泉には手・足さしひたして、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

問一、「あはれ」な月の鑑賞の仕方の具体例を3つまとめなさい。

--	--	--

問二、「春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へる」鑑賞の仕方を言い換えた

⑨ 「の」は格助詞だが、どういう用法か？

⑩ 「影」の意味は？

⑪ 「椎柴・白樫などの」はどこに掛かっているか？

⑭ 「よき人」とはどういう人か？ 「よき人」の反意語は何か？

⑮ 「こそ」の結びを文法的に説明しなさい。

⑯ 「まもり」の訳は？

表現を抜き出さない。(

【「花は盛りに」の文全体についての設問】

問一、対句表現をまとめなさい。

① 花は盛りに

① 雨に向かひて月を恋ひ

③

⑤

春は

⑫ (秋の) 月の夜は

問二、作者が「よい」としている鑑賞の仕方を現代の日本に当てはめて、「現代版『花は盛りに』」を記しなさい。

